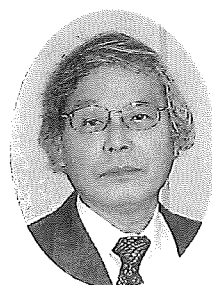


巻 頭 言

日本語から日本語への翻訳（日⇄日翻訳）が必要な「曖昧日本語」

NIPTA 理事
日本アイアール知的財産活用研究所
矢間 伸次



私がこれまで「NIPTA 巻頭言」で述べてきた「平明日本語」の能書きの多くは、篠原先輩の受け売りである。その理由は、翻訳技術について論評、評価する能力が自分に無いからである。しかし翻訳者達は、理解に苦しむ日本語表現と、どのように向き合っているのか？という私の疑問は尽きない。

前にも述べたことがあるが、彼とのご縁は、“日本から出願した米国特許明細書の読解に多くの技術者や知財部員が困っている”という、私の相談から始まった。彼は、自分の目で確かめて“これは余りにも酷い”ということで、その酷い世界へ足を突っ込むことに成った。特許翻訳の世界へ引きずり込んだ私の責任は重い。

1990年、日本アイアール社の中に「知的財産活用研究所」を発足させ、世界で通用する、戦える特許明細書を作るに必要な「平明日本語運動」に取り組んできた。この運動を支えてくれているのが、篠原先輩である。

彼は呆れながらも、英語苦手の私に、“あなたは、なぜ英語を苦手とするのか、その理由は何処にあるのか、どうすれば、その苦手を克服できるのか”といった課題に対し、これまでの英語学習法と違った切り口を用意して

くれた。そして我々日本人が世界へ「物・事・考え」を誤解なく分かりやすく

伝えるためには、「平明日本語」を強く意識する必要に迫られていること。それは、翻訳ソフトの支援が受け入れやすい「やさしい日本語」のことである、と。まさに目から鱗であった。

彼が強調されていたのが“多くの日本人は、残念ながら日本語とその文化が抱えている問題について深く考えることはなかった。つまり「文化が言語を作り、言語が文化を育てる」ということに対して、無神経であったから母国語と英語を対比する視点を持ち合わせていなかったことだ”と。

つまり人は、言語（母国語）で考えるので、観方や考え方の違いは処理する順序に現れられる。英語と日本語の順序が違うことは、日本語処理手順にはそのままでは乗らないことになる。コンピュータ風に言えば、日本語オペレーティングシステム（OS）では、手順が違うので、処理できないことになる。

更に単純化恐れずに日本人と西欧人の、モノの観方、考え方を纏めてみる。日本人は、自然・環境の中に溶け込んで存在している自分を確認し、その自然・環境の説明をつけて、

自分の存在を「控え目」に表明する。つまり、自然を客観的に眺めることはせず、その中に溶け込み、自然と一体化する。

一方、西欧人は自分が何者であるかを、自然や他者との比較をすることで自己を確認する。つまり、その環境の中で、自分は“何を、何のために”しているのか、他者と自己を対立する客体 (Object) として、客観的に観察し、分析し、評価する。

このように、文化の違い、つまり、モノの観方や考え方の違いは、当然言語の違いに反映される。それは、言語の構造の違いと、表現の順序の違いとなって現れる。つまり“英語を学習する時に、なぜそのような表現方法を取るのか、なぜそのような言い方をするのか、理解することが基本である”と。

彼は特許翻訳について、次のように述べている。特許翻訳は、発明技術の説明である。技術は、その原理、法則を頭で理解することができれば民族、文化の違いに関係なく、人類の誰もが修得できる。つまり普遍性があり、「文明」と言える。

特許仕様書 (Patent Specification) は、発明技術を言語で表現したものに対して、その権利が与えられる。文明である技術を、言語で権利主張するためには、世界の共通言語である英語で説明するのが手取り早い。つまり特許英語は、開かれた国際言語として「標準性・普遍性・開放性」が高く、好むと好まざるに関係なく、一つの「文明言語」と言えるほどのものになっている。それは、英語を学ぶ意欲さえあれば人類の誰もが理解しやすく修得しやすい言語構造になっていることを意味する。

知財 (IP) 戦争とは、詰まるところ言語の戦いである。世界で通用する、戦える「グローバル特許明細書」を作るには、世界の主要言語である英語と互換性 (変換できる) のある、「やさしい日本語」を強く意識することである。

それは世界の共通 (普遍) 事項の記述を英語へ容易に変換できる「文明日本語」のことである。

それは日本文化に根ざした抒情的で「美しい日本語」でなく、伝わる「やさしい日本語」のことである。では、どのようにして「やさしい日本語」を書けばいいのだろうか。じつは極めて単純である。英語で記述されている「物・事・考え」と同じ内容を日本語文章で明快に書けるように訓練し、その言語構造に慣れれば済むことである。世界の普遍事項を論理的に明快に書き表すことにおいては、英語が格段に適しており整備されているから、とにかく真似するのが手取り早い、と。

【補足】：とにもかくにも英語文章に慣れることだ！と篠原先輩は説くが、「読めない、書けない、喋れない」の三拍子が揃った私にとって、英語とのお付き合いは苦痛でしかない。彼が私に教えてくれた手法は、先ず文書の全体構造を理解すること。そして、文章は一つの建造物であるから「構造化・図面化」できることを利用すること。つまり一つの文章は、3つのモジュール (modules) 1.Subject 2. Verb 3.Object で構成されていること。そして記述種類、1. 属性 2. 状態 3. 働きかけを合わせると「3×3」となる。英語文章を「3×3方式」で切って、切って、切りまくり、それを縦に並べて表示すると、驚くほどその構造と流れが見えてくる。これが「篠原メソッド」である。この拙稿をお読みになっている皆様にとって当たり前のことではしょうが、私にとっては、これまで聞いたことがない英語学習法であった。

【参考】：篠原先輩の膨大な資料 (レポート、ブログ、書籍等) から「言語の構造から学ぶ英語学習」という表題で、自分なりに纏めてみた。

<https://www.ipma-japan.org/kisokouza/kisokouza.html>